

2.

弥生時代後半国内最大級の鍛冶の村「垣内遺跡(鍛冶工房跡)」発掘現場 walk

国生み神話の淡路島で、弥生時代後半 卑弥呼の時代の大鍛冶工房村が出土した
倭国から初期大和王権誕生へ 日本誕生の謎を解き明かすかも・・・

淡路島 淡路市黒谷 2009.1.25. by Mutsu Nakanishi



鍛冶工房跡 航空写真 インターネットより



鉄素材と思われる大型鉄製品

弥生時代後期(1世紀～3世紀前半)の大鍛冶工房跡「垣内遺跡」 淡路市黒谷 2009.1.25. 朝



淡路に最大規模の鉄器工房群 邪馬台国論争に一石

2009年1月23日朝刊



弥生時代後期の鉄器工房跡が広がる垣内遺跡(兵庫県淡路市黒谷) 2009年1月23日

弥生最大の鉄器工房 近畿で初、中核移行示す 垣内遺跡

2009年1月23日

垣内遺跡:弥生時代最大級の鍛冶工房を確認 兵庫・淡路

兵庫県淡路市(淡路島)の垣内(かい)遺跡で、鉄器を製作する弥生時代後期の大規模な鍛冶(かじ)工房とみられる竪穴建物跡8棟が確認され、同市教委が22日発表した。弥生時代のものであると見られる。淡路島が鉄器の一大産地だったことがうかがえるほか、日本で鉄器生産技術が伝わったルート説明のうえでも注目されそうだ。

標高約200メートルの丘陵地にあり、07年度から調査している。今回確認されたのは弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。弥生時代後期後半(2世紀初め～3世紀初め)の竪穴建物跡11棟、うち8棟で、床面に竈(かまど)を築き、土を塗った。

2009.1.23. 朝刊で弥生時代後期の大鍛冶工房集落「垣内遺跡」の出土を伝える新聞各紙〔上記写真はインターネット版〕

1月22日深夜 ラジオを聴いていると「淡路島北部の淡路市黒谷の垣内・カイト遺跡で 弥生時代後半(1世紀～3世紀前半)の大規模な鍛冶工房跡が出土したと伝えている。 確認建物跡17棟のうち鍛冶炉のある鍛冶工房跡が10棟と鍛冶工房の割合が大きく、鍛冶の村の様相が濃いという。大鍛冶工房集落の出現で、1月25日発掘調査現場で 現地説明会が開かれる。これを逃せば、生の姿はもう見られない。絶好のチャンス。是非 行こうと。

弥生時代後半(1世紀～3世紀前半)というと邪馬台国の卑弥呼の時代と重なる。

まだ、朝鮮半島・大陸に近い北九州諸国が製鉄技術を握っていたと思われる時代 既に瀬戸内海の東端 大和の入口淡路島に



朝鮮半島からの鉄素材入手のルートを確立し、鉄器製造の大鍛冶工房を営む勢力があった。 これはすごい。

この淡路島の勢力は卑弥呼・邪馬台国につながる勢力だったのだろうか・・・

また、淡路島は古事記・日本書紀に記載された「国生み神話」の島。出雲と同じく、神話としか考えられていなかったことが、この遺跡の出現で「史実」の重みが増してゆくのだろうか・・・

弥生時代後半といえば、大和王権成立の前夜 邪馬台国の位置論争の時代。

国内で鉄を作ることができず、国づくりに必要な武器・農工具などの鉄器製作に必要な鉄素材を朝鮮半島に頼り、その入手を競った時代である。

- 弥生時代後期の2世紀後半から3世紀前半 魏志倭人伝に初めて倭国の女王として登場する邪馬台国の卑弥呼。
- 景初三年(239年) 魏に朝貢使節を派遣し、魏より倭王の金印と銅鏡100枚を与えられたという。
- 弥生時代後半 当初 鉄の技術は朝鮮半島・大陸に近い北九州諸国が独占していたが、その後 出雲・伯耆・丹後・吉備そして 大和・畿内へ鉄の蓄積が東進して行く。この鉄器使用で初めて実現できる国造り
(大土木工事を伴う国土の開墾・開拓とリーダーの権威の象徴であると大古墳の建設)

古墳時代の大和王権成立へと突入する前夜 日本誕生へと突き進む激動の時代である。

吉野ヶ里遺跡と纏向遺跡 邪馬台国の位置論争の論拠になっていた弥生遺跡に、淡路島の大鍛冶工房遺跡が加わる。大和巻向説が勢いづく発見である。

「邪馬台国から初期大和王権の誕生へ」 謎の日本誕生を解き明かす鍵は「朝鮮半島の『鉄』の供給ルート支配をめぐる同盟」といわれる。弥生時代後半から古墳時代にかけて、北九州から東へ 出雲・伯耆・丹後・吉備を経て大和へと伝わったと考えられてきた実用鉄器製造の鍛冶技術。そして、4・5世紀 畿内・大和に展開した脇田・南郷 布留 大県などの専業鍛冶工房集落群が初期大和王権を支えたことがすでに明らかになっている。その先駆けとも取れる淡路島での大専業鍛冶工房集落である。

日本誕生に大きな貢献をした古墳時代畿内の大専業鍛冶集落の先駆けとなった大鍛冶工房跡跡が発掘された生の姿で そっくりそのまま見られる。

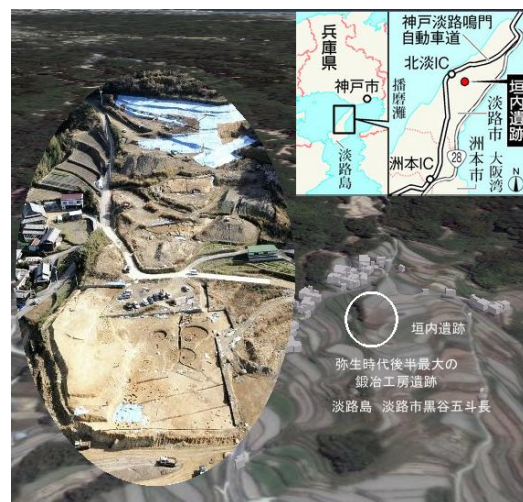
どんな鉄素材が持ち込まれたのだろうか??

鍛冶炉はどんな構造だったろう??

高温維持に欠かせない羽口は既にあったのだろうか??

日本で5世紀後半に スタートするたたら製鉄のプレたたら痕跡があるかもしれない?? (この時期 大陸・朝鮮半島に類型がない「たたら製鉄・塊錬鉄製鉄法」として日本での製鉄がはじまる。)

本当に 次々と古代製鉄のイメージが次々とひろがり、興味は尽きない。

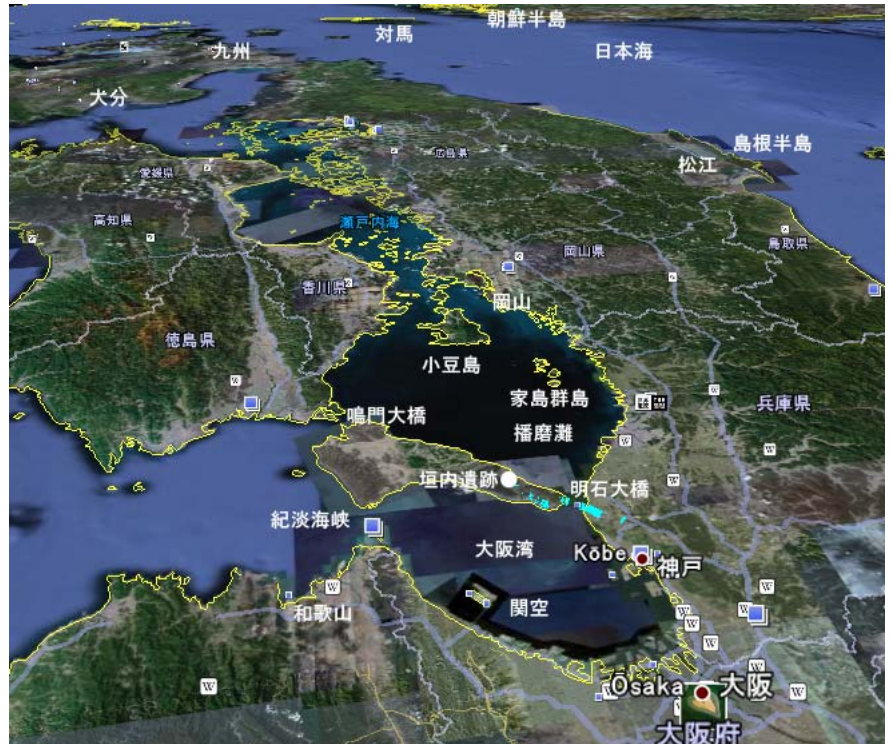


今回大鍛冶工房集落が出土した淡路市黒谷 垣内遺跡の位置 google などより

早速、インターネットや淡路市に照会して、
垣内遺跡の位置やルート进行调查。
垣内遺跡のある淡路市は淡路島の北半分
旧北淡町などが合併してできた町 野島断
層が通る町で その直ぐ南側である。
私の住む西神戸からは約40KM 明石大橋を
通って 車で約40分ほど。 すぐ近くである。

淡路島は神話の島。 出雲と同じく 日本
誕生への「鉄」の重要性を考えると淡路島で
この時代の製鉄関連遺跡が出てもおかしく
ない。 でも、出るとしたら 早くから開け、平
野部が広がる南側丘陵地と思っていました
が、北西部の丘陵地とは ビックリです。
どんな風に どんな大きさ・形の鉄素材が国
内にもちこまれたのか??

また、たたら製鉄が始まる5世紀後半まで、
どんな風に製鉄技術が繋がってきたのか
謎を解く鍵のひとつ。



淡路島は北九州・瀬戸内と大和を結ぶ「鉄の道」の中継点か?

弥生時代中期、朝鮮半島から九州北部を経て、日本海、瀬戸内海沿いなど複数
ルートで東へと続く「鉄の道」 よくわからぬ実態が解けるかも・・・

1月25日(日) そんな夢を膨らませながら 珍しく雪が舞う
寒い朝 淡路島の中央部 瀬戸内海側海岸沿いの淡路市黒部地
区に出土した弥生後半の大鍛冶工房跡・鍛冶工房跡「垣内遺跡」
の発掘調査現地説明会に出かけました。

西正面に男鹿島などの家島群島 右手に姫路の海岸線が見晴ら
せる小さな尾根筋の傾斜地に10棟の初期の鍛冶工房トータル17
棟の建物跡が密接して出土。 これだけ多くの弥生の鍛冶工房
が密接して見つかったことに驚きました。

一番見たかった謎につつまれた朝鮮半島からの実用鉄器素材
「大型鉄素材」もバッチリみました。

うっすらと雪で地面が濡れて 炉跡が見えるか心配しましたが、
うっすらと被熱し赤茶けた土の炉跡がいくつも見えました。
この時代の鍛冶炉の一型式 「地面が掘られず、羽口も無し」。
尾根筋を吹き上げる自然通風の中で鍛冶作業がなされたようだ。
この型式は北九州というより、山陰・大和の鍛冶炉の型式に近いと聞いた記憶がある。

やっぱり、大和と関係深い鍛冶炉か・・・

それにしても 大和王権成立へと進む前夜 すごい鍛冶工房集
落が畿内の入口に出土した。

尾根筋の一番上に立って、出土した大鍛冶工房跡 そして そ
のむこうの瀬戸内海をみていると 鉄の道のロマンが次々と頭
に浮かんでいきます。



尾根筋に広がる遺跡全体 2009.1.25.

標高約 200m 海岸から約3KM

その先に瀬戸内海を見晴らす



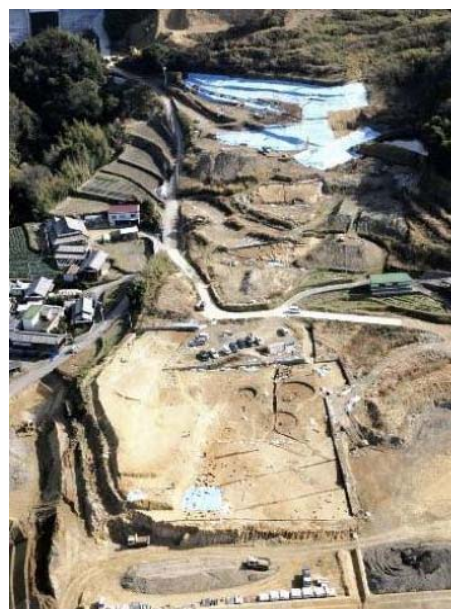
大型鉄製品が出土した鍛冶工房跡 2009.1.25.

竪穴住居の壁際に大型鉄製品

中央部に3つの炉跡・石槌が出土

1. 弥生時代後期の鍛冶工房跡 淡路市 垣内遺跡 概要

2009.1.25. 「垣内遺跡発掘調査 現地説明会資料〔淡路市教育委員会〕」を中心に1月25日現場写真を加えて整理しました



1.1. 垣内遺跡の調査のあらまし と 遺跡概観

明石海峡から淡路島に入った淡路鳴門自動車道は、淡路島の西海岸沿いに南北に山々が連なる丘陵地を南西に抜け、瀬戸内側の西海岸沿いに出て、すぐに今度は再度丘陵地を南方向に大きくカーブして抜けてゆく淡路市黒谷（旧北淡町黒谷）地区。

このカーブの頂点位置である海岸に北淡 IC が設けられ、両側を山に挟まれて狭いならかな丘陵地が奥の山裾へ伸びている。

垣内遺跡はこの海岸から約3km 奥に入った淡路市黒谷の五斗長〔ごっさ〕地区のなだら



な丘陵地の尾根筋の標高約 200m 台地の上 東西約 500m 南北約 100m に広がる弥生時代後期（西暦 50～220 年頃）と中世（西暦 1200～1400 年頃）の遺跡。

平成 13～16 年に行われた分布調査で垣内遺跡発見され、その後 五斗長地区圃場整備事業に伴って、平成 19・20 年度の 2 年間にわたって見られる石製工具類、多数の炉跡を有する建物跡（鍛冶工房跡）が発見された。

全部で 17 棟の建物遺構が発見され、そのうち 10 棟が鍛冶工房跡と鍛冶工房跡の割合が高く、この地が「大鍛冶工房村」の様相を持っている。鉄器が重要な役割を演じたといわれる古墳時代と大和王権の誕生へとつながる重要な弥生後期の「大鍛冶工房村」の出現である。

〔 「大鍛冶工房村」 垣内遺跡 遺構図 〕



2008 年発掘調査 主要部 2008. 1. 25.

- SH-302 鍛冶工房跡（大型円形竪穴建物 少なくとも 1 回建替）鍛冶炉跡 10 石槌 金床石 鉄製品 12
- SH-303 大型鉄素材が出土した鍛冶工房跡（大型円形竪穴建物）鍛冶炉跡 3 石槌 鉄製品 5（内 1 は大型鉄製品）
- SH-304 鍛冶工房跡（方形の竪穴建物）鍛冶炉跡 1 壁際で石槌・砥石・鉄製品 1
- SH-305 円形竪穴建物 炉跡発見されず
- SH-306 鍛冶工房跡（竪穴建物 南半分が崩れ半円状で出土） 鍛冶炉 1 鉄片 1



2008 年発掘調査 主要部尾根筋の上部 ③地区 2008. 1. 25.

SH-308 鍛冶工房跡（円形竪穴建物跡・重なって出土） 鍛冶炉跡 2 以上 石槌 1 鉄片 1

SH-309 鍛冶工房跡（円形竪穴建物跡・重なって出土） 鍛冶炉跡 3 以上



SH-310・311 の上部より 尾根筋に広がる遺跡から播磨灘遠望 2008. 1. 25.



SH-310 焼失円形竪穴建物（半円形で出土）



SH-311 方形建物 炉跡確認されず

2008 年発掘調査 主要部尾根筋の上部 遺跡の最上部②地区 より遺跡全体

2008. 1. 25.



SH-307 鍛冶工房跡 2008 年調査部 周辺
(竪穴建物 まだ 1/3 部分調査) 鍛冶炉跡 4



2007 年調査部 周辺 ④-1・2 地区



2007 年調査部周辺④-1・2 地区 へ下ってゆく道



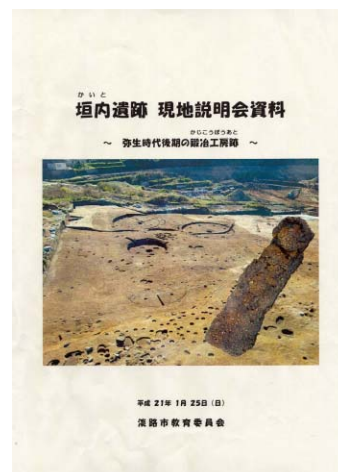
尾根筋の最下部より 尾根筋に広がる遺跡全体 2008. 1. 25. 2007 年調査部は既に埋め戻されている

1.2. 垣内遺跡現地説明会資料 - 弥生時代の鍛冶工房跡 -

2009. 1. 25. 淡路市教育委員会

非常にわかりやすく遺跡の発掘結果がまとまっています。
インターネット掲載による資料がまだ公開されていないので、
このホームページに仮置きさせていただきました。

■ 垣内遺跡発掘調査 現地説明会資料 「弥生時代の鍛冶工房跡」



か い と
垣内遺跡 現地説明会資料

かじこうぼうあと
～ 弥生時代後期の鍛冶工房跡 ～



平成 21年 1月 25日 (日)

淡路市教育委員会

I 垣内遺跡とは

1. 垣内遺跡の発見

垣内遺跡は、兵庫県淡路市黒谷の五斗長地区にある（図1参照）弥生時代後期（西暦50～220年頃）と中世（西暦1200～1400年頃）の遺跡で、平成13～16年に行った分布調査で発見されました。遺跡は、今の海岸から直線距離で約3km、標高約200mの山の上にあり（図2参照）、東西に伸びる尾根を中心に、南北約100m、東西約500mの範囲に広がっているものと予想されます。

2. 垣内遺跡の発掘調査

五斗長地区では、農業生産法人等育成緊急整備事業（ほ場整備事業）に伴い、平成18～21年度の4ヶ年で4遺跡20,484㎡の発掘調査を計画していますが、そのうち、垣内遺跡では平成19・20年度の2ヶ年で17,884㎡の調査を実施中です。（図3参照）

3. 平成19年度の調査

平成19年度の調査では、弥生時代後期の^{たてあな}竪穴建物跡6棟と^{ほったて}掘立柱建物跡1棟を発見し、その内、2棟の^{たてあな}竪穴建物跡で鉄器を作っていたことがわかりました。また、最も古い時期（後期初め頃）の^{たてあな}竪穴建物跡1棟では、石器を作っていたこともわかりました。このことから、当時の人々が使っていた道具が、石から鉄へ移り変わる様子を詳しく知ることができるほか、鉄の道具を作るムラとしては兵庫県内で最も古い時期の遺跡として、大切な遺跡であることがわかりました。

II 平成20年度の調査成果

1. 調査のあらまし

本年度は、平成20年5月～平成21年2月末までの予定で、7,776㎡の発掘調査を行っています。

今回の調査では、弥生時代後期後半の^{たてあな}竪穴建物跡11棟を確認しました。建物跡の平面形は9棟が円形、2棟が方形をしています。そのうち8棟（円形7棟、方形1棟）の床面に強い熱を受けて赤く焼けている炉跡が確認されました。これらの^{たてあな}竪穴建物跡を中心に、^{てつぞく}鉄鑊（やじり）をはじめとする鉄製品やその未製品、鉄器作りの素材となる鉄片、鉄器作りの際に^{たがね}鑿で鉄板を裁断してできた鉄片など約45点の鉄製品が出土しました。また、石鎚（ハンマー）や鉄床石、砥石などの鉄器作りに使ったと考えられる石製工具も数多く出土しています。これらのことから、今回確認された^{たてあな}竪穴建物跡の多くは弥生時代後期に鉄器を作っていた^{かじこうぼう}鍛冶工場の跡であると考えられます。

2. 確認された^{たてあな}竪穴建物跡

このあとは、見学していただく順路に沿って、それぞれの建物跡の内容を説明します。（図4参照）



④-3 地区全景

① 竪穴建物跡 SH-307

この建物跡は、全体の約2/3が地面の下に埋まっておりますが、1/3だけが姿を見せています。復元すると直径が約9.0mの円形の建物跡と予想できます。床面には4箇所の炉跡が発見されています。炉跡の形は不定形で、大きなもので160×75cmの大きさがあります。



② 竪穴建物跡 SH-306

南半分が崩れて無くなっているため、半円形の姿をした建物跡です。元の形に復元すると直径が約5.5mの円形の建物跡になります。床面の中央やや東よりの位置に楕円形をした炉跡が1箇所あります。床面を磁石で調査したところ、ごく小さな鉄片が発見されました。炉跡は楕円形で、80×55cmの大きさです。



SH-307 (上)・SH-306 (下)



SH-305

③ 竪穴建物跡 SH-305

直径が5.6m、円形で4本柱の建物跡です。この建物跡には炉跡は確認されていません。中央の穴も浅く、工房跡と考えられる建物とは少し異なっています。多くの工房跡に囲まれた中で、それらとは違った役割を担っていた建物跡かもしれません。

④ 竪穴建物跡 SH-304

平面の形が方形の建物跡で、一辺の長さが4.2×3.0mの小さな建物跡です。2本柱で、床面の中央部に炉跡が1箇所、そのすぐ隣で土坑とそれから南東隅に伸びる溝があります。壁際に石鎚と砥石、鉄製品1点が発見されています。大型の工房跡と違った役割を果たしたのかもしれませんが。炉跡の大きさは、75×50cmです。



SH-304



砥石



石鎚

⑤ 竪穴建物跡 SH-303

今回確認した建物跡の中では、2番目の大きさの建物跡です。形は円形で直径が9.7m、床面には3箇所の炉跡があります。鉄製品が5点、石鎚などが発見されました。その内、全長約20cmの大型鉄製品が北側の壁際に発見されています。

炉跡の大きさは、大きなもので100×90cm、110×80cmの大きさがあります。

⑥ 竪穴建物跡 SH-302

今回確認した建物跡の中では、最も大きな建物跡です。円形で、直径が10.5mあり、床面には10箇所の炉跡が確認されました。壁際に掘った溝や柱跡が二重になっていることから少なくとも一回の建て替えを行っていると思われます。大きくなった建物跡は10本柱で、普通の建物跡に比べて柱が壁近く掘られている

特徴があります。火を使う作業のため、建物の中を広くしたかったのかもしれませんが。この建物跡からは、鉄製品が12点、石鎚^{いしづち}、鉄床石^{かなとこいし}などが発見されています。



SH-303



SH-302

⑦ 竪穴建物跡 SH-308・309

SH-308と309はその一部が重なる形で発見されました。重なっている状況から、SH-309は308よりも古い建物跡であることがわかります。SH-309の床面に3箇所以上、SH-308には2箇所以上の炉跡が確認されています。炉跡の大きさはいずれも径約60cm程度と、ほぼ同じ大きさをしていました。この建物跡からは、鉄片1点と石鎚^{いしづち}が出土しています。



⑧ 竪穴建物跡 SH-310

北西の半分が水田を作る際に削られたため、半円形をしています。床面には、たくさんの焼けた材木が倒れており、火災で屋根が焼け落ちたことがわかります。よく観察すると、材木は放射状^{ほうしゃじょう}に広がっており、当時の屋根の構造を想像することができます。



⑨ 竪穴建物跡 SH-301・311

SH-301は円形で、2箇所に張り出しがみられる建物跡です。床面には炉跡があり、石鎚^{いしづち}、鉄床石^{かなとこいし}が出土しました。

SH-311は一辺が3.9mの方形の建物跡で、鉄床石^{かなとこいし}に似た平らな石が発見されましたが炉跡が確認されていないため、工房跡かどうかはよくわかりません。

SH-308・309(上) SH-310(下)

2. 出土した遺物

① 鉄製品

今回の調査では、約45点の鉄製品が出土しました。錆がひどく、クリーニングなどの作業を行わなければ詳しいことはわかりませんが、鉄鏃（やじり）のほか、素材とみられる鉄片や加工の際に出る裁断片などが多くみられます。その中で、SH-303から出土した大型鉄製品は、錆が付着した状態ではありますが、全長が約20.0cm、幅約4.0cm～5.0cm、厚さ3cm、重量564gと非常に重厚な作りの鉄製品です。



出土鉄製品



大型鉄製品

② 鍛冶工具

鉄器作り（鍛冶作業）に使ったとみられる石製の道具もたくさん見つかっています。鉄を打ち延ばす石鎚（ハンマー）や台に使った鉄床石、砥石などがあります。特に、石鎚は材質や大きさなど種類が豊富で、作業の目的に応じて種類を撰んだのかもしれませんが。

石鎚など石製鍛冶工具（右）



③ 土器

数多くの弥生土器が出土していますが、この遺跡で特徴的な土器として「小型土器」があります。作りや形は普通の弥生土器そっくりですが、高さが5cm～10cmと小さく、実用品とは考えにくい土器です。お祀りなど、何か特別な用途に使用された土器と考えられます。

SH-202 (H19) 出土小型土器（右）



Ⅲ まとめ

今回の調査では、鉄製品やその未製品、鉄素材や鉄器作りの際に出る鉄片などとともに鉄器作りに使ったとみられる石製工具類、多数の炉跡を有する建物跡（鍛冶工房跡）が発見されました。これらの内容は、当時の鉄器作りの様子を具体的に知ることができる貴重な資料となります。

また、平成19年度の調査をあわせると、全部で10棟の鍛冶工房跡が存在した可能性があります。確認した全建物跡17棟に占める鍛冶工房の割合が高く、まさに「鍛冶のムラ」ともよべる様子がみられます。今回の調査で、これらの工房跡が少しずつ時期と場所を変えながら、弥生時代の終わりまで継続して営まれていたことが明らかとなり、安定的に鉄器作りを行っていたものと考えられます。

当時、とても貴重な「鉄」の素材を手に入れ、最先端の技術とも言うべき鍛冶の技術を学び取り、懸命に鉄器を作り続けた人々の姿が想像されます。

淡路島北部では、中期まで少なかった遺跡の数が、後期に急増する現象がみられます。それらの遺跡のほとんどが今回の垣内遺跡のような標高100～200mの丘陵の上で発見されています。このような現象の背景には、今回の調査で明らかになった鉄器の製作といったことが原因の一つであった可能性もあり、弥生時代後期における淡路島を考える上で、重要な調査成果といえます。

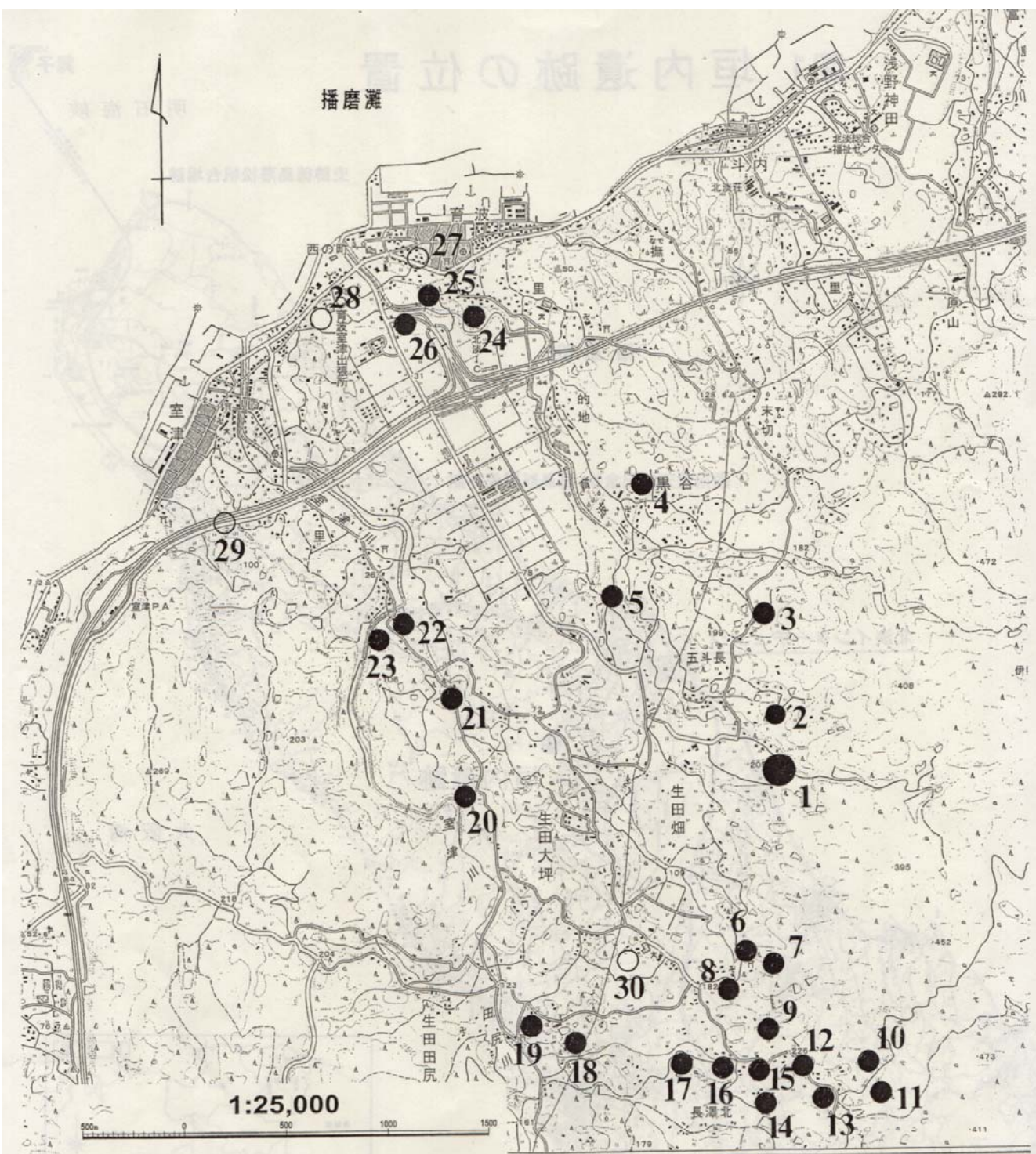


北淡路における弥生時代の遺跡数の推移

2000.12 作成

図1 垣内遺跡の位置





No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	垣内遺跡	弥生後期	11	笠松B遺跡	弥生	21	杭田遺跡	弥生
2	山ノ神遺跡	弥生後期	12	林遺跡	弥生後期	22	野瀧遺跡	弥生
3	妙神谷遺跡	弥生後期	13	小久保遺跡	弥生後期	23	室津土井遺跡	弥生
4	長守遺跡	弥生	14	上条遺跡	弥生後期	24	全戸B遺跡	弥生・中世
5	黒谷小田	弥生後期	15	笠松A遺跡	弥生後期	25	寺門遺跡	弥生・中世
6	大浅田遺跡	弥生	16	酒屋遺跡	弥生	26	掛内遺跡	弥生・中世
7	林遺跡	弥生後期	17	松本遺跡	弥生	27	育波浜田遺跡	古墳(製塩)
8	小久保遺跡	弥生後期	18	色目遺跡	弥生後期	28	育波堂の前遺跡	縄文
9	上条遺跡	弥生後期	19	生田畑遺跡	弥生後期	29	築鼻山古墳	古墳
10	笠松A遺跡	弥生後期	20	鑄文字原遺跡	弥生後期	30	備中館	中世(城館)

図2 垣内遺跡周辺の主要な遺跡

※ ●は弥生時代の遺跡。弥生時代以外の遺跡は主な遺跡のみ掲載。

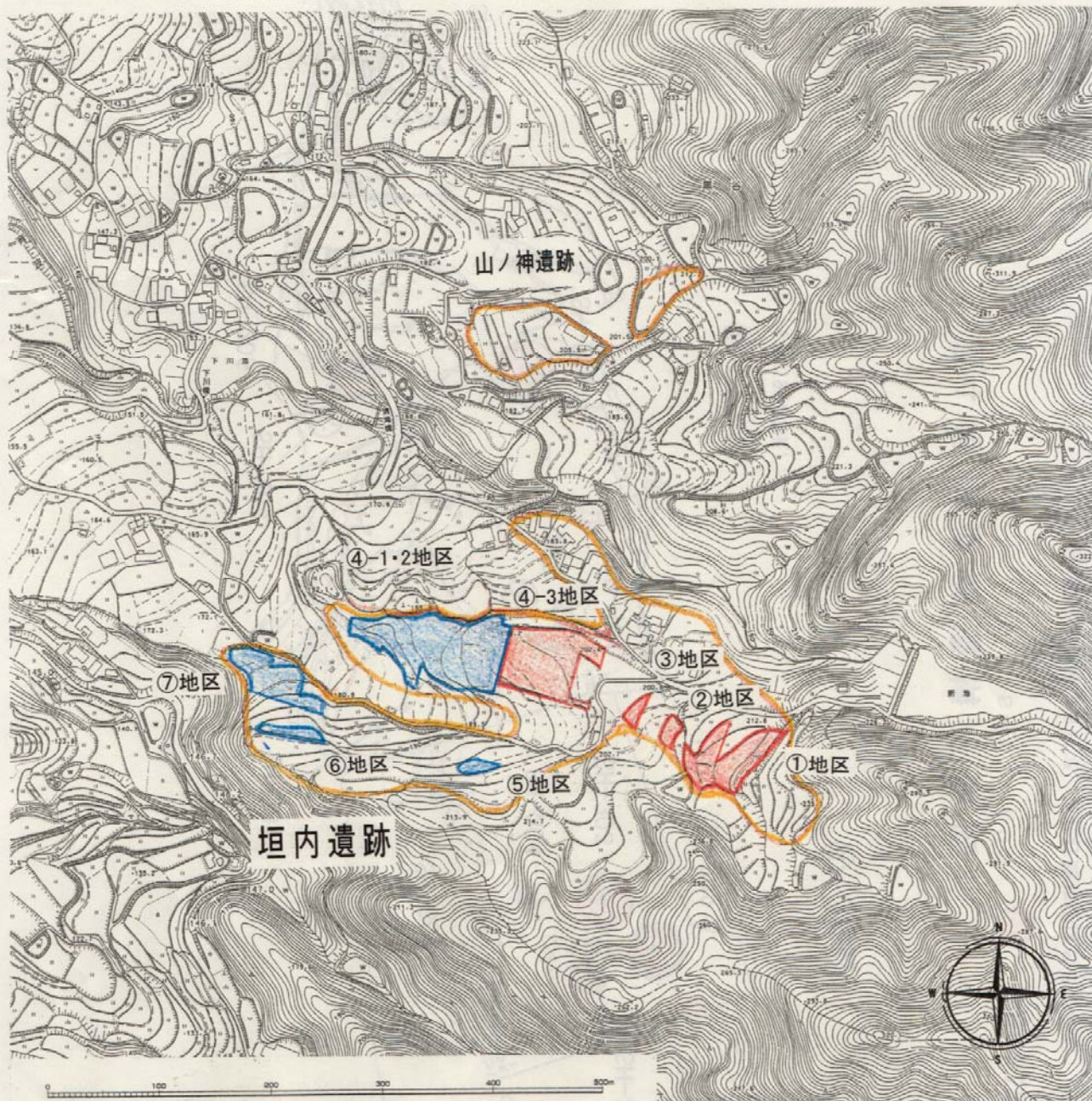


図3 垣内遺跡調査区配置図

凡 例

- ... 遺跡の範囲
- ... 平成19年度調査範囲
- ... 平成20年度調査範囲

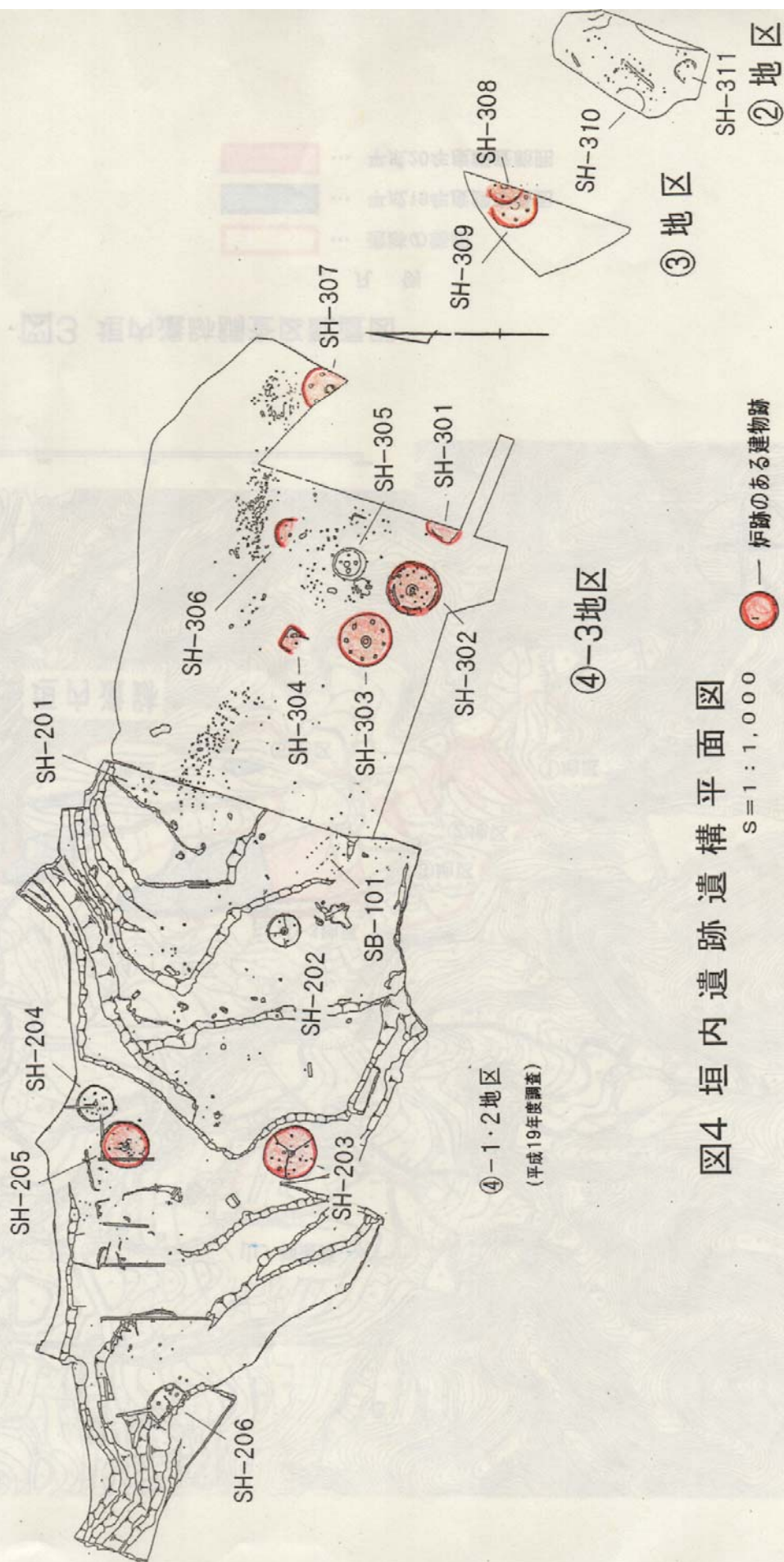


図4 垣内遺跡遺構平面図

1.3. 淡路島で 弥生時代後期の「大鍛冶工房村」が出土した意義 私見



この淡路島に出土した「大鍛冶村・垣内遺跡」

これだけ集積した弥生後期の鍛冶工房跡が見つかった例はなく、しかも 鉄の道 瀬戸内海の東端。

次の古墳時代 日本誕生・大和王権を支えた畿内の大專業鍛冶工房の先駆的な鍛冶工房ではないか???

次の4世紀以降 大和王権の勢力拡大・日本統一の基礎となったのが畿内大和周辺部の山際に営まれた脇田・南郷・留布などの大專業鍛冶工房。

卑弥呼の時代の大鍛冶工房が大和の入り口にあった。邪馬台国は やっぱり 巻向大和にあったのか???

時はちょうど大和王権が成立する前夜 卑弥呼の邪馬台国の時代である。ちょうど実用鉄器の需要が拡大する時代倭国の諸国が大陸・朝鮮半島の鉄素材を求めて必死になっていた時である。

卑弥呼は当然 この大鍛冶工房を知っていたらう。

まだ畿内・大和には鉄器の蓄積が少ないと
思われていた時代に 大陸・朝鮮半島から
北九州・瀬戸内・大和へと続く「鉄の道」

がすでに瀬戸内海の東端まで存在し、瀬戸内海の東端・大和の入り口に大鍛冶工房があったとなると卑弥呼の邪馬台国の位置論争にも大きな影響を与え、大和巻向遺跡 邪馬台国説が活気づく。



私には もうひとつ夢がある。神話・伝承は昔の史実をここでも物語っていたのか????

国生み神話の淡路島 神話が語る日本誕生に鉄を通じて大きな役割を演じたのか???

淡路島は、『古事記』『日本書紀』の中で、「国生み神話」の舞台。

遺跡から約8KM南 淡路島のほぼ中心部には、国生みの主人公「イザナギ・イザナミ」が祭られている伊弉諾神宮がある。

神話が描くような中心的事実が今までは出ていないが、かつて同じことが言われた出雲では 神庭荒神谷遺跡 加茂岩倉遺跡の出現で神話の世界が史実を物語っていることが明らかになってきた。

この垣内遺跡が邪馬台国そして大和へとつながる大鍛冶工房跡遺跡だとすると「神話としてしか語られなかった淡路島」が一躍 国生みの鉄器供給基地の可能性 日本誕生への重要な役割が見えてくる。

この淡路島でも神話が史実に基づく可能性 そして その先には各地に残る製鉄伝承もまた 真実味を帯びてくる。

すごい 遺跡である。

2. 淡路島に出土した弥生時代後半の大鍛冶工房村 垣内遺跡 Walk

発掘調査現地説明会に参加 2009. 1. 25.



朝 みぞれ混じりの雪で真っ白になった垣内遺跡での現地説明会 朝早くから大勢の人が詰め掛けていた 2009. 1. 25. 朝

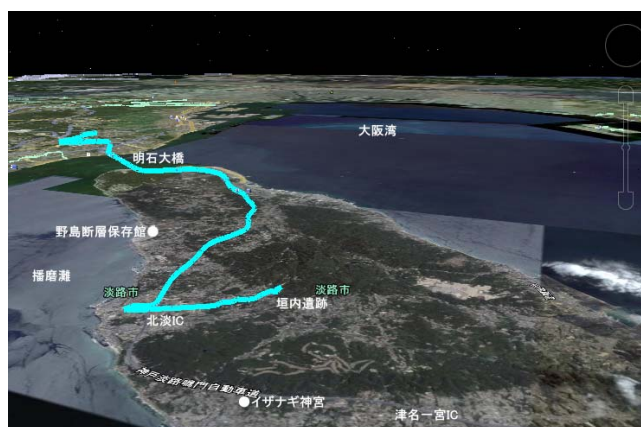
夜 雪が降り、みぞれ混じりの雪になったり、晴れ間が出たり、くるくると天候が変わる 1月25日の朝。

遺跡が雪に覆われれば 何も見えないかもしれないと思いながら、朝9時 淡路島 垣内遺跡発掘調査現地説明会に出発。弥生の鍛冶工房跡が発掘されたままの姿が見られる。それも1つでなくいくつかの鍛冶工房が密集して存在する大鍛冶工房村である。 こんな機会は本当にまたとない。

23日の朝の朝刊各紙には「弥生時代最大の鉄器工房」「まるで工業団地 弥生鉄器工房」「鉄の道 解明に一步」などの見出しが躍り、朝日一面には「卑弥呼の邪馬台国論争に一石!」と遺跡のすごさが報じられている。

神戸からは約40km 神戸淡路鳴門自動車道に乗り、明石大橋を渡れば、30分ほどで、遺跡のある北淡ICにつける。 現地説明会は10時30分から。「こんなに早く行って どうするの? 」と家内に言われながら、「今回は 古代鉄だけでなく、古代史の愛好家で一杯になる」と早く家を出る。

明石大橋を渡るときには真っ暗になって、みぞれ雪。高速道路を走る短時間の間にもクルクル天気が変わる。でも、いつもの冬に比べれば、暖かい。



淡路島・垣内遺跡の位置と行程図 2009. 1. 25.



みぞれ雪でかすむ明石大橋 2009. 1. 25. 朝



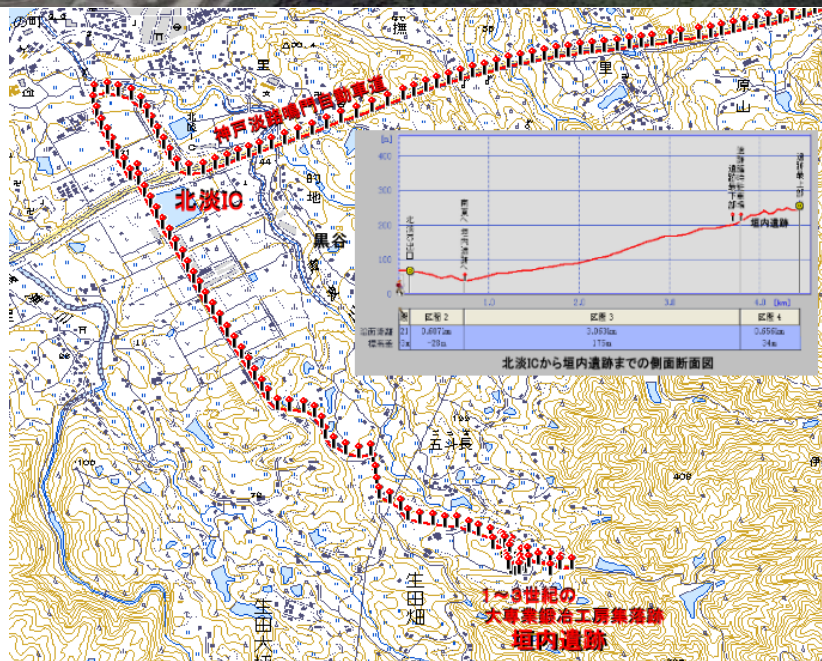
淡路島的高速道路を南へ 晴れ間が見え出す 1. 25. 朝

みぞれ雪の明石大橋の写真など めったに取れないと淡路島サービスエリアに飛び込み、デジカメをパチパチやるが、あまりいい写真は撮れず。淡路島は通いなれた道。淡路島に入って 大阪湾側の丘陵地に沿って南へ津名 IC。そこから南西へ丘陵地を横断して播磨灘側にて、海が見え出したら、北淡 IC。淡路島サービスエリアからは 10 分ほどだった。腰につけた GPS ロガーを見ると 自宅から 33km 標高 66m 時刻 9 時 40 分である。高速道路はここからまた、大きく南東へカーブしながら、また丘陵地の間を抜けて東側へ出て洲本から鳴門へ抜けて行く。

垣内遺跡への道は 前日 Fax で淡路市教育委員会から送っていただいた遺跡の位置地図で場所と行く道筋が確認できたので、迷うことはない。北淡 IC を出て、海岸沿いから反転して、高速道路を横切って まっすぐ山へ向かって、直線道路をそのまま丘陵地を登ってゆけばよい。

北淡 IC を出て直線道路に出たあたりから、またみぞれ雪が激しくなる。

直線道路がつき、丘陵地にかかる T 字路に黒谷の標識と遺跡への案内板の矢印があり、集落を抜けると圃場整備のため。掘り返された段々が続く尾根筋の横を道が登ってゆく。この掘り返された丘陵地全体が垣内遺跡で、少し登ったところに入口があり、集落の人が立ち、現地説明会の臨時駐車場へ案内してくれた。掘り返され、土が積み上げられた中を進むと、丘陵地の高台の端に駐車場があった。



垣内遺跡のある淡路市黒谷地区の地図と垣内遺跡の位置



みぞれ雪の中 直線道路を東へ 丘陵地への T 字路に黒谷・遺跡への案内板も 圃場整備に掘り返された五斗長の丘陵地

9時50分 まだ 現地説明会まで30分以上もあるのに もう車で一杯。多くの人の姿が見える。

車をでると遠く海が遠望できるなだらかな広い台地の上で、360度展望が利く。段々に区切られて、傾斜した尾根筋の台地の中腹で、圃場整備でむき出しになった地面が上方にも、下方にも見える。

あまり登ってきたとの意識はなかったが、随分高いところに立っていて、周りは雪で真っ白。その一角にテントが張られ、その下方に真っ白な地面の上に円形の形で掘り込まれた 赤茶色の地面がくっきり。発掘された竪穴建物跡が幾つか浮きでている。垣内遺跡の中心部である。

円形の竪穴建物跡の回りに何人もの人が囲んでいるのが見えるが、まずはテントへ 現地説明会の受付を済ましに上がって行く。



垣内遺跡の発掘現場 2009. 1. 25.

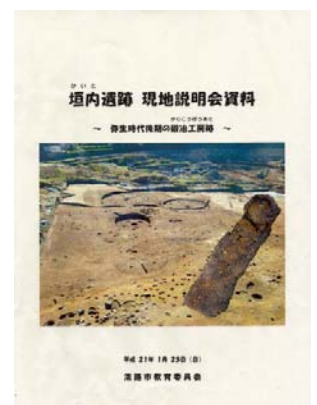
圃場整備が進む尾根筋の台地の上 上にも下にも段々畑が続く

テントのところは垣内遺跡の発掘現場が下方に広がる一段上の広場で、そこからは発掘現場全体が見渡せる。また、段の縁に3張りテントが立っていて、現地説明会の受付と黄色の箱の中に整理された発掘調査で出土した遺物が

展示され、多くの人が群がっていた。受付で署名して現地説明会の資料をもらう。

随分遠くからやってきた人たちの署名があり、報道関係のカメラがいくつかすえられ、インタビューしている記者の姿も見え、脚光を浴びるこの遺跡の位置づけが垣間見える。

現地説明会の資料には遺跡の発掘のあらまし・遺跡の遺構配置図・発掘された遺構それぞれの写真と出土遺物が、写真・図とともに 実によく整理されて、コンパクトにまとめられ、この資料をもって遺跡全体の個々の遺構を訪ねられるようになっていた。



受付の横の机には透明袋に入れられ 整理された出土遺物が黄色の箱に入れられて並べられ、多くの人が群がっている。

ぜひとも見たかった鉄器加工用の鉄素材「大型鉄製品」や数々の鉄製品 そして 鍛冶工具・土器が並べられていた。鉄製品は、まだ 出土したままの姿でサビが表面を覆っていて、形がよくわかりませんでした。

弥生の時代の鉄素材 当時は朝鮮半島の鉄素材に頼っていた時代 実用鉄器製造にかかせない鉄素材はどんなものだったのか・・・薄い板状の「鉄ティ」では 実用鉄器はつくれない。厚さのある強い鉄素材が目目されているが、まだ その実態がよくわからぬ謎の鉄素材。



そんな大型鉄素材がこの鍛冶工房でも出土した。

写真などでは何度か見たが、イメージがよくわからぬ鉄素材 サビにつつまれていましたが、厚さ3cm 長さ約20cm 幅約4cmほど。これなら鑿加工ではない本格的な鍛冶加工で大きな鉄器ができる。

この成分はなんだろう??? 鋼だろうか それとも 鑄鉄か・・・

次の分析作業が待ち遠しい。



2008 年度発掘調査で出土した垣内遺跡出土遺物



現地説明会資料に整理掲載されていた垣内遺跡出土遺物 (展示されていたものと同じ遺物です)

現地説明会はこの広場で開かれるが、まだ 時間があるので、現地説明会資料の遺構配置図や遺構の説明を見ながら遺跡の中へ。 弥生の鍛冶工房を発掘調査されたままの姿で見るのは初めてである。



2.1. 弥生後半の遺跡 全体を眺める 瀬戸内海・朝鮮半島へと続く鉄の道を描いて

遺跡の中心部であるテントの縁に立ってぐりと見渡し、遺跡全体を眺める。

後ろ側は尾根筋 緑に覆われた山の下、今ブルーシートが架けられたところまでが、垣内遺跡。前に広がるのは 2008 年度発掘調査された遺跡中心部。ここからは見えないが、この下方 圃場整備中の段々畑が広がる尾根筋の端にある集落の墓場があるこんもりとした丘までが遺跡範囲である。海岸から約3km 奥にはいった山裾の小さな尾根筋に1世紀から3世紀にかけて、約170年間確認された実数で17棟の竪穴建物 そのうち 鍛冶炉が見つかった鍛冶工房建物が10棟の大専業鍛冶工房の村があり、その後古墳時代になると消えてしまうという。



標高約220m 黒谷 五斗長地区の丘陵地尾根筋の垣内遺跡発掘調査現場 2009. 21. 25.

写真上 ①⇒遺跡の一番下から南東方向 尾根筋全体

写真下 ②⇒遺跡の中心部から北西方向 遺跡中心部から海岸方面

中央 遺構図の番号がついているのが、竪穴建物で 赤色がついているのが、鍛冶工房跡

この遺跡の最上部 尾根筋の上のところへ上ると垣内遺跡のある尾根越しに海岸部から播磨灘が見通せる。右写真に示すとおり、舌状台地?とも言うべき周囲が崖上の小さな尾根筋が遺跡の広がる場所で、この台地からは海岸の向こうに広がる播磨灘・瀬戸内海が見渡せ正面には播磨灘に浮かぶ男鹿島 右手には姫路の工業地帯が見える。



遺跡最上部から播磨灘そして播磨灘に浮かぶ男鹿島を遠望する 2009. 1. 25.

これは どう考えても要害の地 弥生後期には「戦」に備えた「高地性集落」が作られたが、ここも まさにそんな要害の地。

そして ここから 瀬戸内海に続く道筋をたどれば北九州から朝鮮半島へと「鉄の道」が続いていたことが、ストレートに納得できる。



読売新聞は「まだはっきりしない朝鮮半島の鉄素材の持ち込みルート解明されるかもしれない」と報じ、朝日新聞は「鉄の集積が北九州に比べはるかに小さいこの畿内・大和への入り口に朝鮮半島の鉄素材ルートを持つ大勢力があったことは この時代の邪馬台国論争に一石を投じる」と。



垣内遺跡のある淡路市黒谷の鳥瞰図と瀬戸内海から朝鮮半島に続く「鉄の道」

卑弥呼を女王にした邪馬台国の連合体 そして 古墳時代 大和王権成立に関与した出雲・吉備・東海そして大和の連合体 それらをつなぐキーワードは「鉄（朝鮮半島の鉄素材・鉄の道）」だという。

この淡路島も古事記・日本書紀に登場する「国生み神話」の島。

いずれ、これらがつながる時代がくるかもしれないし、また それを繋ぐのが、この淡路島に出土した弥生後期の大鍛冶工房村「垣内遺跡」かもしれない。

この垣内遺跡に続く「鉄の道」をひよっとしたら鍛冶遺跡が多く出土する四国・阿波とのかかわりから、淡路島の南からのルートかもしれないとも思いましたが、正面にぽっかり浮かぶ男鹿島を眺めるとやはり 瀬戸内の讃岐・播磨との関係がホイントではないかと思えてくる。これに 吉備の地がどのように関連するのだろうか・・・

2.2. 2008 年度発掘調査 中心部の鍛冶工房遺跡跡



2008 年発掘調査 主要部 ④-3 地区

すぐ目の前に広がる発掘調査跡は 2008 年発掘調査の主要部。雪で地面が白くなっているのに、遺構がくっきり浮き出ている。資料の遺構図と発掘調査跡を照らし合わせて 鍛冶工房跡とを照らし合わせる。

左手に見える円形の発掘跡 SH-302・SH-303 そして 右手奥の半円に見える発掘跡 SH-306 が鍛冶工房跡。右手手前円形の発掘跡は炉跡が見つからなかった建物跡 また中央奥 ブルーシートの手前の人のいるところに見える方形の発掘跡も鍛冶工房跡である。

写真には見えていないがこの段の足元左手の段の下に半分顔を出している方形の鍛冶工房跡 SH-301 があり、すぐ後ろ側のところにも 2/3 がまだ地中にある円形の鍛冶工房跡である。

この狭い場所に 6 つも鍛冶工房跡が密接して存在する。同時に存在したかどうかは不明であるが、びっくりである。

また、見慣れた竪穴建物跡というところと方形・長楕円型が主とっていましたが、鍛冶炉が出土した鍛冶工房跡のほとんどが 直径約 5~10m の大型円形の



2008 年発掘調査 主要部 ④-3 地区

竪穴建物で床面に複数の炉跡が見つかった。これもこの垣内鍛冶工房跡遺跡の特徴である。

左手に見える円形の発掘跡 SH-302 は今回見つかった鍛冶工房跡のうち最大のもので直径 10.5m あり、少なくとも 1 回建替が行われ、10 箇所の炉跡や 12 点の鉄製品や石鎚・鉄床石がみつかったという。

また、隣接する SH-303 も直径 9.7m の大型円形の竪穴建物の鍛冶工房跡で壁際からここで鉄素材と考えられる大型鉄製品がみつかり、3 つの炉跡 5 点の鉄製品・石鎚がみつかった。

なお 方形の建物跡の鍛冶工房跡 SH-304 は 4.2mx3.0m の小さな建物跡で中央に炉跡が 1 つ そして 壁際で石鎚・砥石・鉄製品がみつっていますが、すぐそばに土坑とそこから伸びる溝があり、他の大型円形鍛冶工房跡とはちょっと違った役割を担っていたかもしれないという。

概要を頭に入れて、この段の右手から発掘現場に下りて、見学通路を円形の 304 と半円の SH-306 の間を通過して 方形の SH-304 を通過して、大型円形の鍛冶工房跡 SH-302・SH-303 のところへ行く。



SH-305 竪穴建物 直径 5.6m 円形 鍛冶炉跡なし
鍛冶工房跡にかこまれ、別の役割を担っていたのか?



SH-306 円形竪穴建物の小さな鍛冶工房跡 直径 5.5m 円形
半分削られているが、鍛冶炉跡が1つある



SH-304 方形の竪穴建物の鍛冶工房跡

被熱して赤茶けた色をした炉跡のすぐ横に溝のついた土坑があり、反対の壁際に砥石と石鎚が見える



SH-302 円形の竪穴建物
直径 10.5m の大型鍛冶工房跡
柱・壁際の溝が2重であることから、
少なくとも一度立て替えられている。
床面に鍛冶炉跡が10 鉄製品 12
石鎚 鉄床石が出土
10 本柱の柱跡が普通の建物に比して
壁際に近く、鍛冶場の空間が広く取れ
るように工夫されている。



SH-303 円形の堅穴建物 直径 9.7m の大型鍛冶工房跡 壁際から大型鉄製品が出土した鍛冶工房跡

床面に鍛冶炉 3 鉄製品 5 石鎚が出土 炉跡の大きさは 80X90cm, 10X80cm など大きなものがあった

垣内遺跡の鍛冶工房は円形の大型堅穴建物が主で、工房の内部を広くするためか 柱は壁側に近い位置にある。

そして、工房内の鍛冶炉は複数箇所存在する工房が主である。

また、弥生時代中期 九州北部に鍛冶炉が伝来した当初 炉床にはきっちりした地下掘り込みがあるのに対して、いずれの工房の鍛冶炉も地下への掘り込みがなく、床面を炉床面としており、簡略型の鍛冶炉となっている。鍛冶炉が東に伝播してゆく過程での炉床の退化傾向がこの垣内遺跡でも見られている。



SH-303 大型鍛冶工房跡の床面に残る被熱部（鍛冶炉跡） SH-302 大型鍛冶工房跡の床面に残る被熱部（鍛冶炉跡）

床面に鍛冶炉が 3 箇所出土

床面に鍛冶炉が 10 箇所出土

したがって、工房内の鍛冶炉跡は被熱による赤茶けた色に変色した床面として その痕跡をとどめている。

また、この時代 いずれの鍛冶炉跡周辺からも羽口は見つかっておらず、竈はまだないとかんがえられ、原始的な風の吹き込みは行われていたと考えるが、尾根筋を吹き抜ける風を利用した鍛冶炉操業が行われていたものと考えられる。



SH-303 大型鍛冶工房跡の床面に残る被熱部（鍛冶炉跡） SH-302 大型鍛冶工房跡の床面に残る被熱部（鍛冶炉跡）

このような垣内遺跡の鍛冶工房跡の特徴は 他の部分で出土した鍛冶工房跡でも基本的には変わっていない。

弥生時代後半の大鍛冶工房村である垣内遺跡の鍛冶工房の特徴はほぼ下記のようにいえるだろう。

小さな尾根の上に主に直径 10m 近い円形の大型堅穴建物の鍛冶工房がいくつも存在し、床面に床面を炉床とする複数の鍛冶炉があり、石鎚・鉄床石・砥石などの鍛冶具を使って鍛冶作業を行って鉄器を作っていた。

2.3. 尾根筋の上部 遺跡上部 ③地区から最上部②地区へ



尾根筋の上部 垣内遺跡③地区から 最上部の②地区（ブルーシートの下）

垣内遺跡の主要部上方の尾根筋からも鍛冶工房跡が出土している。

テントの段から尾根筋の上方へ登ってゆく。こちらも圍場整備がすすめられていて、どこも地面がむき出しになっている。階段状の畑を見ながら数段上へ回り込んだところに、半円状の竪穴建物が重なって出土した発掘調査があった。ここが③地区でその上 さらに数段上ったところが遺跡の最上部 ②地区である。



尾根筋の上部 垣内遺跡③地区

SH-309 の上に SH-308 が重なって 二つの円形竪穴建物 鍛冶工房跡が出土した③地区
SH-309 より>3 箇所の鍛冶炉 SH-308 より>2 箇所の鍛冶炉のほか鉄片 1 石鏃 1 が出土



SH-310 焼失円形竪穴建物



SH-311 方形建物 用途不明

尾根筋の上部 遺跡の最上部②地区



尾根筋上部 遺跡の最上部②地区より、垣内遺跡がひろがる尾根筋を遠望

2.4. 尾根筋の下方 遺跡下部④-1・2 地区から遺跡の端 集落の墓地の丘へ



尾根筋の最上部より垣内遺跡全体を見下ろす 中央ブルドーザー周辺が遺跡下部④-1・2 地区 その後の丘が集落の墓地

垣内遺跡の 2007 年発掘調査部である遺跡の一番下のところへ降りてゆく。

テントのある遺跡の主要部から下の方へおりていったところで、尾根筋の一番した墓場がある小高いが見えるところまでが、垣内遺跡で、既にブルドーザーが多数入り、平らな段状の圃場整備が進んでいる。遺構図面に書き込まれている④-1・2 地区 2007 年の調査で 2 つの大型鍛冶工房跡がみつかった場所である。

遺構がまだ残っているのではないかとあちこち歩いてみましたが、既に圃場整備でうめもどされてしまったようで、位置の確認ができなかった。



④-1・2 地区 2007 年調査部 周辺

3. 現地説明会ほか現地で教えてもらった遺跡情報



午前 10 時半 テント前の広場で 現地説明会がはじまった 広場は参加者で一杯

午前 10 時半 テント前の広場で 現地説明会が始まる頃には広場は参加者で一杯。天候も回復して青空。

この日 朝と午後の 2 回現地説明会がありましたが、900 人以上の参加と新聞が伝えていました。

現地説明会は現地説明会資料に基づいて、発掘の経緯 出土した鍛冶工房跡の見学の見所などが紹介され、後は各自順路に従って見学することで散会。散会后 個々に概要説明された淡路市教育委員会の齊藤氏の周りで質問。

内容は現地説明資料を整理して「1. 弥生時代後期の大鍛冶工房跡 淡路市 垣内遺跡」にもまとめましたが、この弥生時代後期の大鍛冶工房遺跡について その特徴を要約して以下に整理しました。

【弥生時代後期の最大級の鍛冶工房村「垣内遺跡」概要】



1. 弥生時代 後期 最大級の鍛冶工房跡

1. 弥生時代後期 1 世紀～3 世紀 約 170 年間続いた国内最大級の鍛冶工房跡（出土した土器より確定）
鍛冶炉のある竪穴建物（鍛冶工房跡）10 棟 鍛冶炉のない竪穴建物 7 棟 計 17 棟の竪穴建物が出土。
出土建物のうち 鍛冶工房跡の割合が高くまた狭い場所に鍛冶工房が密集して存在することや尾根筋近傍には集落が営まれていないことなどから大鍛冶工房村と考えられる。
2. 出土遺物は鉄素材と考えられる大型鉄製品 1 鏃・鉄片など鉄製品 約 45 石槌・砥石・金床石などの

鍛冶工具や土器・ミニチュア土器が多数出土している。

3. 垣内遺跡の位置は はるかに播磨灘・男鹿島を正面に見下ろす海岸部から約3km 奥に入った平地の端。標高約200m 舌状台地状に伸びる小さな尾根筋の上に時代と共に下から上へ広がった鍛冶工房集落。
4. この垣内遺跡の存在する淡路島北部は山を挟んで反対東海側に西日本最大の縄文集落佃遺跡がありますが、この垣内遺跡が出土する弥生時代の後期まで、あまり集落のないところ。

しかし、この垣内遺跡が出現する弥生後期以降 急激に遺跡数が増加する。

このことから 「鉄」がこの淡路島北部の展開に大きなインパクトをもたらしたかも知れぬ。

(朝鮮半島・北九州から瀬戸内そして大和へと続く「鉄の道」の重要中継点???)

当時 日本では製鉄技術はなく、朝鮮半島から鉄素材を輸入していた時代。日本各地に興った国々では、この鉄素材供給ルート確保がもっとも重要な事項であり、邪馬台国そして初期大和王権誕生の古墳時代へと時代が流れてゆく。)



2. 垣内遺跡 鍛冶工房・鍛冶炉の特徴

1. 風が吹き抜け、周囲と隔絶された 尾根筋の上に 直径10m 近い円形の竪穴建物が密集して存在
2. 竪穴建物の鍛冶工房内部には複数の鍛冶炉跡と見られる被熱場所がみられ、鍛冶炉跡がないことから床面を炉床としたあまり高温が維持できぬタイプの鍛冶炉が複数存在した。
また、当然ながら 羽口は出土していない
3. 鉄素材は厚さのある大型鉄製品が出土。 鍛冶工具は 石鎚・金床石・砥石などが出土
鍛冶ででた小さな鉄片などの鉄遺物が多数出土しているが、現在サビをかぶったままで 製品・半製品・鉄片の区別がついていないので 鍛冶加工の詳細はまだよくわかっていない。



大型鉄製品



出土鉄製品



石鎚など石製鍛冶工具



出土小型土器



3. 私見 朝鮮半島から大和への 古代 鉄技術伝播の「鉄の道」のルートを考える

弥生の大鍛冶工房村「垣内遺跡」の位置づけ

「弥生時代最大の鉄器工房」「まるで工業団地 弥生鉄器工房」「鉄の道 解明に一步」「卑弥呼の邪馬台国論争に一石!」

などと弥生時代後期の大鍛冶工房跡「垣内遺跡」について、新聞各紙のミダシが踊った。また、1月25日の現地説明会には900人を超える参加者があったと報じられた。

当然ながら、1月25日の現地説明会では新聞のミダシのような説明はなされなかった。

まだ、発掘された遺物・遺構の解析・分析はこれからだし、調査報告が出るのが、待ち遠しい限りである。

でもすごい遺跡である。ちょっとでも新聞のミダシに結びつく知見はあるのだろうか・・・。



現地説明会から帰って、出土した弥生の鍛冶工房村が、弥生時代後期の鍛冶工房遺跡とどんな関係にあるのだろうか・・・

そんな中から「鉄の道」を探るルートそしてこの淡路島で出土した「垣内遺跡」の位置づけを考えてみたい。

さいわい手元には弥生時代の鍛冶炉・鍛冶遺跡を集成整理考察した内容を含む村上恭通氏（愛媛大学 東アジア古代鉄研究所長・愛媛大学教授）の大著「古代国家成立過程と鉄器生産」（青木書房 2007年）があり、弥生時代の鍛冶遺跡の流れが詳細に検討されている。

現地説明で見聞した鍛冶工房の地形・鍛冶工房建屋・鍛冶炉・鍛冶工具などの特徴についても 弥生時代国内鍛冶遺跡の流れが詳細に記述されていて、垣内遺跡の特徴と対比させられることを見出した。

それで、この村上著「古代国家成立過程と鉄器生産」の考察内容に現地説明で見聞した「垣内遺跡」の特徴とを照らし合わせ、垣内遺跡の位置づけならびに 古代 鉄技術伝播の「鉄の道」のルートの痕跡を垣間みてみました。

（ちょっと照らし合わせてみただけで、学問的な検討をやったわけではありませんので、すべて 私の私見です）

また、follow 資料として 下記資料を参照した。

村上恭通著「倭人と鉄の考古学」

第5回暦博シンポ「古代東アジアにおける倭と伽耶の交流」（2002年 国立歴史民族博物館）

「北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影」（2005年 大阪府立弥生文化博物館）

村上恭通著「古代国家成立過程と鉄器生産」より、垣内遺跡の鍛冶工房の特徴と関係しそうなところを抜き出してみると下記のとおり。 行の左端につけた「★」マークは、弥生時代後期の大鍛冶工房村「垣内遺跡」と関連があると考えられる記述にマークしたものである。

1. 鍛冶遺構の形態と集落における位置 （「古代国家成立過程と鉄器生産」 P22-23）

- ★ 1. 一般の住居と同じ竪穴遺構内に作業の痕跡を残す鍛冶工房を検討すると、中期以降 しばしば通常の住居よりも大型の竪穴が採用される例がある。
- 2. 後期中葉以降の鍛冶遺構は集落の中心部住宅跡の密集地がはずされ、周辺部で鍛冶遺構が検出される。
- ★ 3. 一集落遺跡内に複数の鍛冶遺構が検出される場合 それらがひとつの場所に集中する例が増加
 - ・ 北部九州 後期紅後葉から終末 八女市西上ノ山遺跡で5・6軒の鍛冶遺構
 - ・ 中国地域 中期後半 庄原市和田原D地点遺跡
 - ・ 近畿丹後 中期後半 京丹後市奈具岡遺跡
- ★ 4. 丘陵斜面に鍛冶工房が営まれる例 中国山地から日本海沿岸地域における鉄器生産形態としてとらえられる
 - 庄原市和田原D地点遺跡 京丹後市奈具岡遺跡 安来市柳遺跡（後期末葉）

2. 鍛冶炉 （「古代国家成立過程と鉄器生産」 P24-26 P36-44 ）

- ★ 1. 弥生時代の鍛冶炉は大きく次の4つの類型に分類でき、これらの炉が出現する時期・場所に特徴がある。

★

I 類 掘り方を大きくとり、その内壁・床面をよく焼き固め、その中に木炭や土を交互に重ねた
防湿目的の地下構造のあるタイプ I a: 楕円形 I b: 円形

● I a: 中期末葉～後期初頭 福岡県仁王手遺跡 広島県高平遺跡 徳島市谷之遺跡

後期後葉まで、東瀬戸内地域、徳島県域で集中的に展開される

I b: 中期末葉～後期初頭 福岡県安武深田遺跡 徳島市名東遺跡

後期後葉～末葉 阿蘇市狩尾遺跡・湯の口遺跡 大分県高松遺跡 高知県西分増井遺跡ほか

● I 類の炉は九州北部の炉として出現するが、後期以降九州北部にはみられず、周辺部に点在

II 類 掘りかたのみで、内壁がわずかに焼けているタイプ

● 中期末葉～後期初頭 春日井市赤手遺跡 その後 九州で一般的な炉となる。

● 後期以降 九州以外にも広く伝播 III 類 IV 類と並存する場合がある。日本海沿岸で顕著である
島根上野 II 遺跡 安来市柳遺跡 七尾市奥原峠遺跡 松山市東本遺跡・北井門遺跡 善通寺市次見遺跡
徳島県芝遺跡 高知県西分増井遺跡 大阪府星ヶ丘遺跡

III 類 ほとんど掘りかたを持たず。床面をそのまま炉として使用するか、若干の粘土を敷いて操業するタイプ

● 最古例は 中期末～後期初 京丹後市奈具岡遺跡

● 後期以降 香川県下川津遺跡 豊田市南山畑遺跡

★

IV 類 掘りかたを持たず。床面をそのまま炉として使用するタイプ

● 最古例は 中期末葉 庄原市和田原 D 地点遺跡

● 後期以降 山陰から北陸にかけての日本海沿岸地域で 多数例発見

● ひとつの工房内に複数基並存する例が知られている。

● 岡山市津寺一軒屋遺跡で焼土面だけが検出されており、IV 類の可能性

(「古代国家成立過程と鉄器生産」 P40)

このほか 鍛冶具 や 鉄片など出土遺物についても詳細に論述されていますが、

今回 私の方に特徴見分ける感度なく記載を省略しました。

これらの記述について、★をたどってゆくと垣内遺跡の鍛冶工房と関連のありそうな地域が浮かび上がってくる。

1. 円形大型の竪穴建物の中に複数の床面が炉床タイプのIV類の鍛冶炉 日本海沿岸 中国山地
庄原市和田原 D 地点遺跡 京丹後市奈具岡遺跡 山陰から北陸にかけての日本海沿岸地域で多数例
2. 一集落遺跡内に複数の鍛冶遺構が検出される場合 それらがひとつの場所に集中する例が増加
これは鍛冶村から専業鍛冶集落への展開の始まりと見える
これも 日本海沿岸 中国山地の形態
3. 丘陵斜面に鍛冶工房が営まれる例 中国山地から日本海沿岸地域における鉄器生産形態としてとらえられる
庄原市和田原 D 地点遺跡 京丹後市奈具岡遺跡 安来市柳遺跡 (後期末葉)
4. 一方 北部九州に最初に伝わった鍛冶炉のタイプで 九州から広く周辺地域に広がった「掘りかた」のある
地下構造のある I & II 類の鍛冶炉は後期には徳島まで広がり、徳島で大きく展開されるが、どうもこのタイプの
鍛冶炉は近接する淡路島 垣内遺跡では出土していない

これらの鍛冶工房の営まれ方や鍛冶炉のタイプを照らしてみると 特に山陰・日本海沿岸・中国山地の鍛冶炉・鍛冶工房の系譜に見えてくる。また、瀬戸内の交通の要衝として 男鹿島が正面に見え、右手に播磨であることを考えると 日本海側から、出雲や伯耆・丹後などの日本海沿岸から吉備・播磨を通して大和への鉄の道があり、その中継拠点として淡路島・垣内遺跡が考えられないだろうか・・・

この連合は 邪馬台国から大和王権へつながってゆくまさに古墳時代の大和連合軍。 あながち無視できない話である。
朝鮮半島の鉄を独占していた北部九州の時代から 弥生時代後期には山陰の麦木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡などの大量の鉄の集積が示すごとく山陰さらには、丹後・北陸を含め、日本海沿岸には安定した鉄の道が存在していたと考えられてきた。
この鉄の道のルート上に本当に淡路島が登場するのか まだまだ 断言はできないが、 淡路島は 古事記・日本書紀に

国生み神話として登場している。

大和王権誕生の前夜 淡路島で出土した大鍛冶工房跡にそんな夢を重ねても あながちうそでないと思えてくる。

まだまだ 空想 ロマンの世界ですが、新聞の見出しに踊る言葉が事実になると思えてくる 淡路島日本最大級の鍛冶工房跡「垣内遺跡」である。

2009. 2. 10. Mutsu Nakanishi



【参考・引用資料】

1. 垣内遺跡 現地説明会資料 「弥生時代後期の鍛冶工房跡」 2009. 1. 25. 淡路市教育委員会
2. 村上恭通著「古代国家成立過程と鉄器生産」(青木書房 2007 年)
3. 村上恭通著「倭人と鉄の考古学」(青木書房 1999 年)
4. 第5回暦博シンポ「古代東アジアにおける倭と伽耶の交流」(2002 年 国立歴史民族博物館)
5. 「北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影」(2005 年 大阪府立弥生文化博物館)